


 第3期会長から
 

「挨拶」



神谷 幸秀
Yukihide KAMIYA

初代及び第二期の会長を務められた木原元央先生の後を受けて、第三期の会長を務めさせて頂くことになりました。大先生の後、心許ない限りではありますが、会員の皆様からご支援、ご協力を頂き、学会の発展に微力ながら努めてまいりたいと存じますので、よろしく御願い致します。

もはや、学会設立当時の記憶が定かでなくなってきましたので、学会誌「加速器」のオンライン閲覧機能を利用して、第一号にアクセスし、巻頭言、学会設立趣意書、設立の経緯などを読み返してみました。木原先生の「キーワードは連携」というお言葉は、今もまた未来にも通じるものであると思います。また、趣意書の格調高い文面には気が引き締まる思いがするとともに、ここに学会の「原点」があるという思いを新たにいたしました。さらに、拙文の設立の経緯を読み、学会設立までに多くの方々のご尽力されたということ思い出しました。

今更申し上げるまでもなく、加速器は、この一世紀の間に生まれ、その後急速に発展を遂げ、今日ではその利用は幅広い分野に及んでいます。さらに、21世紀の科学・技術、産業、社会を支える重要な基盤技術、テクノロジーの一つとなっています。国においても「量子ビーム」をキーワードとして、加速器の産業利用、産学連携を促進しようという動きがあります。このような状況に鑑みて、学会としても今まで以上に研究者・技術者の交流を図り、関連研究機関や産業界の間の連携を促進する場を提供する方策を模索していくことが必要ではないでしょうか。これは、言うは易く行なうは難しですが、会員の皆様からのご意見、ご提案を御願ひしたいと存じます。また、産業界からの声もたいへん重要と考えています。学会を積極的に利用、有効に活用してやろうという観点でご意見をお寄せ頂きたいと存じます。

さて、ご存知のように、国内における加速器の状況はJ-PARC, RIBF, XFELのような大型施設が建設中、または稼働を開始するなど華々しい面が見られる一方で、特に法人化後の大学における小型、中型の加速器は、経費削減の対象ともなっており、多くの設備は老朽化が著しく、維持するのも困難な状態に陥っているのが現状であり、加速器を利用した研究活動に支障が生じてきています。総合科学とも言える加速器科学は、大中小の多種多様の加速器がそれらの用途に応じて各所に存在して初めて、健全な発展が可能となることを考えますと、このような状況は、若手の人材育成、萌芽的技術の醸成をなす上でも由々しき事態と言わざるを得ません。この窮状の打破に向け、学会が何らかの寄与をすることができればと思っています。

一方、学会のこれまでの4年間の活動を振り返りますと、会誌、年会に関しては、関係者のご努力のおかげで、十分誇れるものであったと思っていますが、一方、それ以外の活動に関しては、私、庶務幹事がサボっていたこともあり、必ずしも十分ではなかったという反省が残ります。この部分の活動を如何に盛り上げていくかが今後の課題の一つではないかと思っています。また、近々の課題としては、学会年会・リニアック技術研究会の名称と主催団体をどうするかということがあります。これに関するアンケート結果や前回の学会総会での議論を踏まえて、再度、この夏の総会で議論が行われる予定になっていますが、多くの方の賛同が得られるような結論に達することを期待しています。「技術研究会」という名称がつかなくなると、大学によっては、所属の技術職員の年会への参加が認められない恐れがあるとのことですが、学会としては、そのようなことが決して起らないよう、所属機関に学会の趣旨、技術交流の意義をご理解頂くよう全力を尽くす所存です。

引き続き、この日本加速器学会が会員の皆様から研究交流、人的交流の場を提供し、さらに我が国の加速器科学の発展に貢献できることを祈念して、挨拶とさせて頂きます。